

コロナ禍のなかで

五十鈴塾での講義ができないままで、半年が過ぎようとしています。皆さまには、ご迷惑をかけ、またご心配をかけて申し訳ないこととです。

新型コロナウイルスの感染拡大が、とくに東京に集中しているせいで遠出を控えざるを得ないから。とはいうものの、いつまで続くのでしょうか。

新聞やテレビでは、過去の疫病流行の話題も時々には報じられます。たとえば、大正七（一九一八）年にかけて世界的に大流行したスペイン風邪。当時の世界人口の約三割にあたる五億人が感染し、約四〇〇万人が死亡しました。日本での死亡者数は、内地の総人口の〇・八パーセント強にあたる約四五万人といわれます。現代のコロナウイルスの感染と単純に比較はできませんが、医療体制がさほどに整っていない時代を想定する

と、その克服は容易なことではなかったでしょう。マスコミの報道などからは、そのときの人のびとの労苦がなかなか伝わってほかないのです。けれども、当時の人びとが手をこまねいて終息を待っていたわけではけっしてありません。いつの時代も、できうるかぎりの手立てをして疫病の拡大を防ごうとしているのです。当然のことですが、人の生命いのちが尊いとともにも、その維持の努力も尊い。そのことを忘れてはならないでしょう。たとえば、町村ごとに避病舎が造られています。大きな町では避病院といたしました。伝染病患者は、まずは隔離を。いつの時代も理にかなった対策といえるでしょう。確かに、そうした隔離施設が存在していました。そこに、小社を設置、厄神やくじんを祀ったところも少なくありませんでした。それで病気が直せるわけではありませんが、自然の脅威の前にはそうせざるをえなかった、という人びと

の謙虚さ。神頼みとはいえ、それも疫病に真摯に対峙する姿勢であったでしょう。もうすっかり忘れ去られようとしています。

そうした先人たちの労苦や信念をあらためて認めてもよいのではないかと、コロナ禍のなか、しみじみ思ったりするこのごろです。

まだまだ終息のみえない日々ですが、皆さまにはどうかご自愛くださいませよう。